

安藤昌益と二宮尊徳の社会経済思想と現代

講師 古藤友子

（国際基督教大学教授・国際基督教大学アジア文化研究所所長）

はじめに

きょうは、安藤昌益と二宮尊徳という江戸時代に生きた二人の思想家の社会経済思想をもとに、現代日本のかかえるいくつかの問題を皆様とともに考えてまいりたいと思います。

安藤昌益（1703～1762）は、出羽国秋田郡二井田村下村（現、秋田県大館市）に生まれ、江戸時代中期を生きた医者であり、思想家です。主著に、刊本『自然真営道』、稿本『自然真営道』があります。昌益は、凶作により多くの農民が餓えに苦しむ状況を目の当たりにし、個々人が欲望を制限し、万人が生産活動に従事すること（「直耕」）を説きました。参考文献としては、安永寿延『稿本自然真営道』（平凡社、1981）、安藤昌益全集刊行会監修、三宅正彦編著『安藤昌益全集』第1、2巻（校倉書房、1981）、安藤昌益研究会編著『安藤昌益全集』全32巻、別巻（社団法人農山漁村文化協会、1982～1987）などがあります。

二宮尊徳（1787～1856）は、本名金次郎、小田原領相模国足柄上郡栢山村（現、神奈川県小田原市）に生まれ、江戸後期の篤農家、思想家として知られる人物です。薪を背負って本を読む少年金次郎の姿は有名ですが、門人の福住正兄が編纂した『二宮翁夜話』、斎藤高行『二宮先生語録』、富田高慶『報徳記』などから尊徳の生涯をうかがうことができます。尊徳は疲弊した農村を復興し、荒地開拓に尽力しました。その過程で尊徳は「分度」（それぞれの分に応じた枠内に支出を制限し、儉約すること）「推譲」（他人を推し進めて自ら譲り、勤労につとめ、分度によってできた余剰金を貯蓄し、また他の利用に提供、贈与すること）など具体的な施策を提唱し、実践しました。尊徳と門人の著作は、編集委員代表佐々井信太郎、二宮尊徳偉業宣揚会編著『二宮尊徳全集』36巻（1932年復刻版、龍溪書舎、1977）としてまとめられています。

なぜ、この二人の思想家を取り上げるかと申しますと、両者ともに農業を特に重視した人物であるからです。まず農業とお金について話をはじめたいと思います。

一、農業と貨幣

一見すると「豊か」な現在の日本ですが、これから先もこのような状態は続くのでしょうか。地球温暖化により気象条件が変わり、化学肥料の大量使用によって土壌は疲弊するなど、日本の農業にとって厳しい条件が出現しています。また穀物自給率でいえば、中国が94%、アメリカが138%であるのに対し、日本はわずか29%でしかありません。1993年のお米の不作時のことを覚えていらっしゃるでしょうか。私たちが少しばかり慌てふためいたことも記憶に新しいところです。その時、日本に住む人の多くは、国の基盤としての農業の大切さをあらためて思い知ったような気がします。

江戸時代には数十回の飢饉があったといわれていますが、そのなかでも三大飢饉（享保の飢饉、天明の飢饉、天保の飢饉）は江戸中期から後期にかけてありました。安藤昌益と二宮尊徳はこのような時代に生きた人物です。昌益は、飢饉という状況下で、金銀財宝より価値のあるものは、粟、米などの食料であるとして、二人の盗賊のたとえ話をしています。

金銀錢無益の事 凶年てんかに転下諸穀突らず、衆人餓死する者多し。強気の者、飢に迫りて斬取し、盗賊す。路の辻に乞食二人有て、一人は粟・米二升許り持てり、貰もらひ溜ためたるなり。一人は金一歩、銀小玉三つ、錢百文袋に入り、首かに掛く。強盗之を視て、粟・米を奪ひ取り、金銀錢を取らず。是れ、無益なること此に知ぬ。（稿本『自然真営道』大序巻）

現代においても、お金さえあれば、いつでも食料が手に入るとの考えは、まちがっているのではないのでしょうか。昌益はさらに、食は人の親であり、米穀を食べて人になるのであれば、人はすなわち米穀である、とまで説いています。

食は、人、物とも与に其おやの親にして、諸道の太本なり。故に転定てんぢ、人、物、皆、食より生て、食を為す。故に食無ときき則は、人、物、即ち死す。食を為す則は、人、物、常なり。故に人、物は人、物に非ず、食は人、物なり。分きて人は、米穀を食して人となれば、人は乃すなわち米穀なり。（『統道真伝』糺聖失）

食こそが、転定てんぢ（天地）、人、物の根源であるならば、金銀貨幣については、どのように認識していたのでしょうか。昌益は医者であったということもあり、彼の貨幣論は五行論をもとに展開されています。五行とは、木 - 火 - 土 - 金 - 水の五つで、たとえば方角でいえば、それぞれ東 - 南 - 中央 - 西 - 北に配当され、季節でいえば、春 - 夏 - 四季の末の18日間 - 秋 - 冬に配当される概念です。昌益は、金銀貨幣はこの五行のうちの「金」であるとし、次のように説きます。

然るに聖人、山中の金を掘り出し、金銀錢を鑄て通用と為す。是れより万国、金の有る所を穿ち取り宝と為す。木・火・土・金・水の用は、極まる則は又早く本の土に帰し易し。金の用は、人貯ひ安き万年本処の土中に戻らず、偏に掘り取るのみなり。故に土中は金気の堅め弱く、転気は濁り易く、不正の気行はれて人病み易く、定気は澄み難く、水は湧き難く、山は崩れ易く、河は埋もれ易く、地振は汰り易く、人氣は脆く成り、内病発し易く、山には木生へ難し。（『統道真伝』 紉聖失）

すなわち、人々は金を宝として元の土中にもどさず、そのために五行の調和が乱れ、天変地異がおこり、人々の健康も害されていく。あたかも現代の世を予言するかのとき主張です。昌益はさらに続けて、

且つ金銀錢の通用の出来より、聖人、自由を達し華美し、貯へ貢り心に任す。衆人之れを視て、金の通用成りて以来、欲心始めて発り、万人凡て金を以て諸用を弁じ榮華を欲す。（中略）彼は此を誑かして利を欲し、此は彼を誑して利し、主従、親子、兄弟、互ひに言を巧みに利を欲し、俗僧、男女、只一に金銭の為に身命亡滅を知らず。転下を奪ひ奪はれ、国を取り取られ、家滅を起し、人を殺し人に殺され、大盜・小賊、刑罰の為に刑戮せられ、上下・貴賤、只一金を欲するの一業なり。（同上）

と言っています。昌益の生きた江戸時代中期は、すでに市場経済に深く組み込まれていた時代ですが、彼は農本主義の立場から、金銀貨幣の出現以来、「人を殺し、人に殺される」という、人間の限りなき欲望の世界が繰り広げられていると警告を発しています。人間の欲望は、ある程度満足させられると、さらに増大するという傾向がみられます。たとえば、ある調査によると、18歳以上の女性のジュエリー保有率は92%で、平均個数は7.6個です。6個以上もっている女性は、さらにジュエリーを購入したいという強い意欲を表明したということです。金銀財宝を欲しがると人々に対して、昌益は次のような痛烈な批判をあげています。

金銀及び珍物、人の利用為る者皆之れ宝・財と謂ふ。宝は他從己れ得て己れを利する。之れを好み喜んで他而と他而と云ふ。是れ他を無して己れを利し、道と他貨を盗むの言なり。転道は己れから他に施す。之れに反きて他而己れを利す則は、転道及び他の物を盗む。故に他而と言ふは盗みの異別の名なり。故に宝を貴ぶは盗みを為すなり。（『統道真伝』 紉聖失）

金銀を他から得て我が物とする行為は、「盗み」であるとしています。これに対して、転（天）道は自分から他に施しており、物欲にとらわれては天道に反し、申し訳ないと説いているのです。

では、二宮尊徳の場合はどうでしょうか。尊徳の財宝論の第一の特徴として、収穫をもたらす田畑を基盤として財宝を認識していたことがあげられます。

無田なるときは則ち生養無し。田有るに因り、生命を育す。田徳有るが故に君も君^た為り。田徳有るが故に父母も父母為り。田徳有るが故に自己も自己為り。田徳有るが故に妻妾も妻妾為り。田徳有るが故に子孫も子孫^{けんぞく}為り。田徳有るが故に眷属も眷属為り。田徳有るが故に衆民も衆民為り。田徳有るが故に財宝も財宝為り。田徳有るが故に交友も交友為り。田徳有るが故に諸芸も諸芸為り。田徳有るが故に車馬も車馬為り。田徳有るが故に万器も万器為り。(『二宮尊徳全集』巻一、『三才報徳金毛録』「田徳人倫を扶助するの解」、原文は漢文)

尊徳は一円を描き、その中央に「田圃」と記し、中央を通る6本の線を引き、その上下に「主君」「父母」「自己」「妻妾」「子孫」「眷属」「衆民」「財宝」「交友」「諸芸」「車馬」「万器」と書いています。これは、貨幣、器具、動物を含む人間社会の基盤が田圃にあることを明確に示したものです。食物の収穫をもたらす田畑なくして、私たちの生活はたちゆかないことを尊徳はわかりやすい図で当時の人々に説いたのです。こうした「田徳」という認識は、現代日本人にとって希薄なものとなっているのではないのでしょうか。

二、自然と人間

地球環境の保全、自然の保護が話題にならない日はありませんが、それでは昌益と尊徳は、自然と人間の関係をどのようなものとして捉えていたのでしょうか。

昌益は、現実にある「法世(こしらえの世)」を否定し、「自然の世」をとりもどすべきであるとして次のように説いています。

自然の世は^{てんち}転定と与に人業行ふて、^{すこ}転定と与にして、^{すこ}微しも異ること無し。(中略) 転定に又春来り、生じて花し、夏盛んに、秋堅剛に、冬枯蔵すれば、是れと与に種を蒔き、^{くまぎ}芸り^{くまぎ}耨りして、実り収め取り、蔵むることを為し、^{いつ}何之れが始まるとも無く、何ん時是れが終るとも無く、真とに転定の万物の耕道と、人倫直耕の十穀生ずると与に行はれて、無始無終に転定、人倫一和なり。転定も^{ひと}自り^す然るなり。人倫も^{ひと}自り^す然るなり。故に自然の世と云ふなり。(稿本『自然真営道』巻一)

転定(天地)も人間も「^{ひと}自り^す然る」のが自然の世であるとし、天地のめぐりに合わせて春に種をまき、夏に草を刈り、秋に収穫して、冬に収蔵するという「直耕」が実現すれば、天地と人倫は一和となるとしています。そして、この「直耕」については、

直耕とは食衣の名なり。食衣は直耕の名なり。故に転定、人、物は、食衣の一道に尽極す。其の外に道と云ふこと絶無なり。故に道とは直耕、食衣のことなり。（稿本『自然真営道』大序巻）

と述べ、天地、万物、人間すべての衣食にかかわる生成、生産活動が「直耕」であり、唯一の「道」であるとしています。昌益の遺した書物は『自然真営道』という名称ですが、その意味について記した序文を見てみましょう。

自然とは互性妙道の号なり。互性とは何ぞ。曰く、無始無終なる土活真の自行、小大に進退するなり。（中略）故に活真自行して転定を^{つく}為り、転定を以て四体、四肢、府臓、神霊、情行と為し、常に通回転、横回定、逆回央土と一極して、逆発穀、通開男女、横回四類、逆立草木と、生生直耕して止むこと無し。故に人、物、各各^{ことごと}悉く活真の分体なり。是れを営道と謂ふ。（中略）此の故に転定、人、物、^{あらゆる}所有事、理、微塵に至るまで、語、黙、動、止、只此の自然、活真の営道に尽極す。（稿本『自然真営道』大序巻）

この文章は、昌益独自の用語、用字法を用いて説かれているため、非常にわかりにくいものです。要点をまとめると、昌益は五行のうち、「土」のみを「活真（^い活きて^{まこと}真）」なるものとして他の四行とは切り離し、その始めもなく終わりもない自己運動の結果、天地、人、鳥獣虫魚、植物が生じると説いています。昌益にとって、人間は天地、動物、植物という自然とは不可分であり、本来同じ「^{ひと}自り^す然る土活真」から生じたものでありました。このような自然観、人間観は、現代社会とはかけ離れた考えと感じられる方が多いと思います。しかしながら、地球環境破壊が進む現代において、もう一度、人間世界と動物、植物、宇宙が、有機体として、生命体として、つながっているという認識をもつことは大切なことではないでしょうか。また、昌益が木、火、金、水ではなく、土を宇宙万物の根源としたことの意味を農業との関連において考えてみることも必要だと思います。

一方、尊徳は昌益とは異なり、実際に農業に従事した人物です。昌益のように「^{ひと}自り^す然る」にまかせて、豊かな収穫を得ることができるでしょうか。そこで尊徳は、額に汗して働き、欲望を制し、儉約につとめ、仁義を行うという人道の大切さを説きました。

田圃の荒るるは天道自然なり、^{こうらん おこたら}耕耘怠^{ほうへき しゃし}すして荒さるるは人道なり。（中略）人心放僻奢侈に流るるは自然なり、仁義礼讓を以て之を教へ之を防ぎ怠らさるるは人道なり。万事皆然り、枚挙するに暇あらず、故に人道の要務は私欲を制して能く能動し、節儉を守て仁義を行ふにあり。（『二宮尊徳全集』巻一、『報徳論』）

では、この人道は天道とどのような関係にあるのでしょうか。天道自然にさからって農業ができるのでしょうか。これについて、尊徳は水車をたとえとして、次のように説いています。

農業は、半ば天に順ひ、半ば天に逆ひ、順逆相須ちて成る。之を譬れば水車のごとし。半ば水中に入り、以て順流に随ひ、半ば水上に出て、以て逆流に従ひ、順逆相須ちて、以て循環を全す。(中略) 則ち其れ天に順ひ、以て播種の時を失はず、其れ天に逆ひ、以て耕耘を怠らざるは、人の道なり。(『二宮尊徳全集』巻三六、『二宮先生語録』、原文は漢文)

半ば天にしたがい、半ば天にさからって人道を实践するという主張は、江戸時代後期、自然の大きな力と格闘しながら農村の復興に力を尽くした実践思想家が達した結論でした。「天道は自然なり、人道は作事なり。天道、人道と和すは、百穀結実の法なり。(『二宮尊徳全集』巻一、『万物発言集』)」
「天道は自然なり、人道は天道に従ふといへ共、又人為なり。人道を尽して天道に任すべし、人為を忍にして、天道を恨る事勿れ。(『二宮尊徳全集』巻三六、『二宮翁夜話』)」という言葉にあるように、尊徳は、人間の作事、人為を尽くすことの重要性を繰り返し述べています。天道の有り様をよく観察しながら、最後まであきらめずに人事を尽くすことは、現代日本に生きる私たちにとっても大切なことだと思えます。

三、社会と人間

次に、社会と人間のことを考えていきたいのですが、その視角はさまざまに設定できると思えます。昌益にそくして見るならば、彼は学者、為政者の役割から人間社会を考えました。一方、尊徳は富者と貧者の関係を一元において捉え、「推譲」の実践を提唱しています。

まず昌益は、学者と学問の欺瞞性をすどくつきます。昌益の時代の学者とは、儒学を学び、わが身を修めて、その徳で天下国家を治めることを理想とする人々です。しかし、いったん凶作に遭えば、学者は自ら養うことができず、他人が作った食物を貪るか、あるいは餓えて死ぬしかないとい昌益は批判します。

聖人の曰く、身を修め、家を斉ひ、国を治め、天下を平らかにすと云へり。転下の学者、之れを貴ぶ。是れ貴きや。凶年に遭ふ則は、不耕貪食の学者の輩、先つて身を修むること能はず、飢えを苦しんで、妄りに直耕の衆人を貪り、或いは餓死す。(中略) 一身を修むることすら能はず、何を以てか国家、転下を治平せんや。(稿本『自然真営道』大序巻)

直耕しない学者が、我が身すら保つことができないのであれば、そもそも学問は何のためにするのでしょうか。それに対して昌益は次のように答えています。

学問は何の為ぞや、唯己^{ただ}を利し、寛楽を願ふの名なり。若し己れを利さず、寛楽の心無くんば、即ち学^{ゆえん}ぶ所以無し。故に学問^な為ざる人は願利の心無し。末世の衆人に利欲の心深く惑^{まど}ひるは、利己たる学問の私教に因^すりてなり。（中略）学を為るは法を修するを以て欲なり。此の故に、学と欲とは体と影の如し。（稿本『自然真道』巻一）

学問をするのは、自分の利益のみを追求し、楽しい生活を望むためであると言っているのです。学と欲は体と影、表裏一体であるとの指摘は、自戒の言葉として記憶にとどめなければならないと思っています。

学者に期待できないとすれば、より良き社会を実現するにはどのようにすればよいと考えたのでしょうか。それに対する昌益の答えは、上にたつ為政者が率先して欲望をおさえ、奢侈に過ぎた生活を改めれば、下の人々もこれにならうというものです。

若し上^もみ、不耕貪食して栄^か侈を為す則^{とき}は、転道を盗むなり。故に、下、之れを羨^{うらや}みて、貨財を盗む。乱、此に始まる。故に、上、之れを明^あかして、栄花、遊楽^{あそ}の侈^とりを止むる則^{とき}は、下、羨むの心無く、欲心自づから止む。是れ上、盗の根を絶やすなり。故に、下、枝葉の賊、自づから絶えて、上下の欲盗、絶る則^{とき}は、庶幾^{こいねが}ふとも乱の名を知らず。（稿本『自然真道』巻二五）

この解決策はいささか単純に過ぎるようにもみえますが、指導者自らが自己中心的な利益追求をやめ、寡欲と清貧をよしとする生活をおくるならば、社会の価値観や人々の生き方も変わってくるのではないかと思います。

さて、尊徳が著書『三才報徳金毛録』において一円を描き、中央に「田圃」を置いたことは前に述べましたが、同書に「財宝増減の解」という個所があります。そこに描かれている図には、中央に「宝」という文字が置かれ、円の十二の方位に、増・減、損・益、禍・福、喜・怒など、相対する言葉が対角線上に記されています。そしてその解説として次のような文が書かれています。

一増有らば、必ず一減有り。一喜有らば、必ず一怒有り。一禍有らば、必ず一福有り。一損有らば、必ず一益有り。（中略）財は本、我が財にあらず、天道の財なり。（『二宮尊徳全集』巻一、『三才報徳金毛録』財宝増減の解、原文は漢文）

尊徳が一円において増減、損益を相対化したその根拠は、財宝を「我」が物とせず、「天道」の財と認識したことにあります。この考え方は貸借についても同様に説かれています。

夫れ元、一円貸借なり。貸す者は、必ず借る者を思慮し、借る者は必ず貸す者を思慮す。貸す

者、借る者、一円為り。氣自ら遍満して已まず。貸借を発して万世に至るまで、貸借二ならずして、元一宝なり。此れ天理自然と謂ふなり。(『二宮尊徳全集』巻一、『天禄増減鏡』、原文は漢文)

財宝を一個人のものとしてみるならば、貸借、損益、増減は、利害が相反する重要な問題となります。しかし、天道の一宝という認識にたてば、あくまで一宝の貸借、増減でしかありません。尊徳はまたこのことを、器に入った水の量をたとえとして、次のように語っています。

器傾きて水増減なき事能はず、是に減するときは彼に増し、彼に減する時は是に増。そもそも其根元を案ずるに、半器に居住するものは常に増減あつて止事なし、一器に居住するものは更に増減なし、本来増減我居住にあり、是之を天理自然成りとするべし。(『二宮尊徳全集』巻一、『一器水動不増不減鏡』)

半器に居住して個人の財宝の増減に一喜一憂するのか、一器に居住して天道一円の財宝という観点にたつのか、尊徳が私たちに突きつけた問いかけです。そして次に述べるような「推譲」という主張は、天道の財宝という認識にたつてはじめて説得力をもつものとなります。

我に増するは、必ず彼に減ず。彼の小は則ち我の大なり。我の富は則ち彼の貧なり。然らば則ち大小貧富、固より一物にして相離れざるなり。猶ほ天地一物、男女一体のごとし。(中略) 男女相和して子孫生ず。富の貧におけるも亦然り。貧富相和して貨財生ず。是の故に富者は天分に止まり、余財を譲りて以て之を貧者に推し、貧者は夙夜勤勤として、余力を推して以て其の徳に報ゆ。貧富大小、各其の分に止まり、其の業を楽しみ其の生を安んず。夫れ是の如ければ則ち貧富相和し、一邑一家の如し。富者は永く富有を失はず、貧者は遂に離散亡滅を免る。(『二宮尊徳全集』巻三六『報徳外記』、原文は漢文)

分なる者は、天命の謂なり。度なる者は、人道の謂なり。分度立ちて譲道生ず。譲なる者は、人道の粹なり。(同上)

「分」が天命であるとするのは、農家に生まれた者は農家に、商家に生まれた者は商家にとどまり、また千石の家に生まれた者は千石の家に、五石の家に生まれた者は五石の家にとどまるという意味です。この点から、尊徳の主張が既存の秩序の維持を前提に説かれていることが確認できます。また「度」とは、一年の収入をはかり、たとえばその四分の三を用い、残りの四分の一を貯蓄、あるいは推譲にあてることです。そしてこの(推)譲は「人道の粹」であると尊徳は説いています。彼はまたわかりやすいたとえ話でこの譲るという行為の効用を語っています。それは、たらいの水をできるだけ我が物にしようと両手でかきよせると水は両手の脇から流れ出ていきますが、反対に、

両手で水を相手に推して譲れば、水はめぐって両手の脇からもどってくるというたとえ話です。

ちなみに尊徳は宗教家ではありませんが、推譲に類似した考え方は、キリスト教、仏教、イスラムの教えにも見られます。たとえば、キリスト教にはヨベルの年（Jubilaem, Annus sanctus）という聖年制度があります。これは50年ごとに雄羊の角笛（ヨベル）をならして、全住民に解放の宣言をする（旧約聖書『レビ記』25章8 - 17節）という律法からきています。その年には土地の所有権をもとの持ち主にもどすこと、貧しい人から利子や利息をとってはいけないことなどが説かれています。またイスラムには、ザカート（zakat）とよばれる義務としての喜捨の制度があります。これはイスラム教徒が一年以上所有する通貨、家畜、穀物などに対して2.5%から20%程度の税金がかけられるもので、政府によって徴収される一種の財産税です。そのお金は、貧しい巡礼者や借金を返済できない者の救済にあてられます。この他、サダカ（ṣadaqa）という自発的な喜捨もあります。キリスト教やイスラムのこうした教えの基礎には、土地や財宝は神のもので、人間はこれらを神から借りているという考え方があると思います。これは尊徳の天道の財という認識と共通するものではないでしょうか。一方、仏教で説かれる布施（dana）は、仏教社会事業の原理の一つとなっています。たとえ勤労によって得た富も自分一人で独占するのではなく、他人にもわけ与えること、富んでいるものだけが布施をするのではなく、乏しいなかからでも与えるという教えは、大乘仏教の自他不二^{じたふに}観に基づくものと考えられます。尊徳の「貸借二ならずして、元一宝なり」という主張もこれに通ずるのではないかと思います。

おわりに

以上、安藤昌益と二宮尊徳の思想をとおして現代の問題 - 農業、貨幣、自然、社会のかかえるいくつかの問題について考えてまいりました。昌益や尊徳は今から150年～300年前の日本に生きた人です。ですから彼らの主張をそのまま現代日本にあてはめることは、当然のことながらできません。けれども、今、私たちにできることは何か、このことを考え、行動にうつす際のひとつの指標を昌益や尊徳は与えてくれているように思います。

ご静聴ありがとうございました。

平成13年7月9日 於 附属図書館ホール

